

ユニークな地質系博物館

5. 夕張市石炭博物館

岡部 賢二¹⁾・矢島 淳吉²⁾

殖産興業のため、聖戦遂行のため、また、荒廃した国土復興のため、夜となく昼となく原野を轟進する長い長い炭車の列。轟々と吹きすさぶ地吹雪きの夜、あかあかと燃えるストーブを囲み、石炭をくべながらの談笑。北国の人間には、南国の人達とは異なった「石炭」に対する特別な思いがあり、ノスタルジアがある。

しかし、それとは別に、石炭には石炭にまつわる多様な科学的、技術的、社会的な事実としての歴史があり、人間の生活のドラマがある。産業革命の原動力となった石炭が、その莫大な埋蔵量を武器に、再びエネルギー源や工業原料としてスポットライトを浴びることがあるのであろうか。鉱量が枯渇して閉山する金属鉱山とは事情の異なる炭鉱の、その後に関つた石炭博物館には、過去の栄華の記念碑であるだけではないのだと言う心意気を感じるのには欲目であろうか。

ともかく、夕張市の「石炭の歴史村」の一角を占める「石炭博物館」を訪れることにしよう。

わが国には北海道の他にも、常磐、宇部、筑豊などの炭田地帯があり、いずれの地にも石炭博物館が建設され、その数は十指にあまると言う。その中において、夕張の石炭博物館はその規模の大きさと資料数に於いて際立っているばかりでなく、壮大なジオラマを含むその展示内容、カッターが唸り自走枠が進み、コンベアーが走る迫真の採炭現場、旧鉱業所が新人の訓練に用いていた現場をそのまま活用した模擬坑、明治21年に発見された時のままの姿で保存されている24尺の石炭大露頭などなど、他に類を見ない特徴を備えていることを、先ず、頭に入れておきたい。

博物館は、夕張市の「石炭の歴史村」建設計画の一環として企画され、それまで郷土資料室や炭鉱資料館に収集されてきた資料を吸収して昭和55年に開館した。開館以来の入場者は150万人を越えたとのことである。

夕張川の支流、志幌加別川の河畔に建設された本館建屋は、夕張新鉱のものを模した黄色の堅坑巻き上げ櫓を伴う2階建(写真1)。レンガ色のセラミック外壁が、周囲の山々の緑にも、厳寒期の純白にも良く映える。

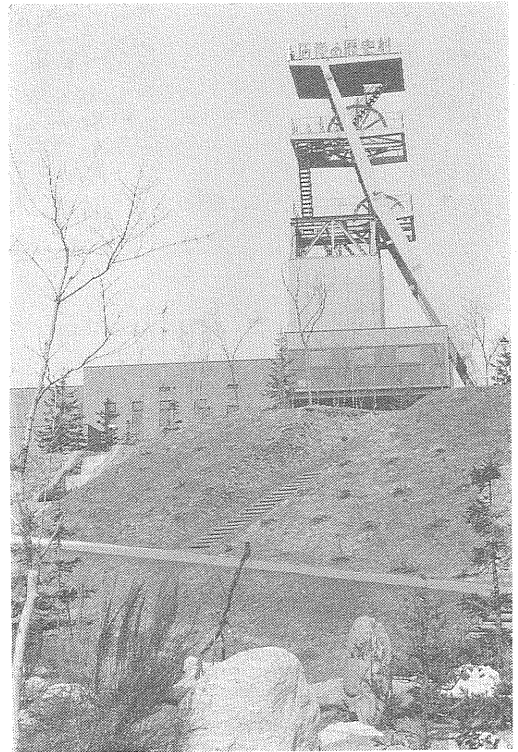


写真1 石炭博物館と立坑ケージ。

博物館は地上の本館(1962m²)と坑内の「炭鉱民俗館」、「炭鉱機械館」、「史蹟夕張礦」(合計1768m²)からなる。

本館の玄関を入るとすぐ「れき青炭」の大塊(約3t)が鎮座し、歓迎してくれる。展示のテーマは1階の「黒いダイヤ」から、2階の「エネルギーを求めて」、「これが炭鉱だ」へと続く。

地質学的展示内容の1階の見せ場は、夕張の石炭の原料の元になった森林地帯の様子が復元された、吹き抜けの2階天井に達する大ジオラマである。メタセコイアの大木、バショウ、ハンノキ、ゼンマイ、イタヤカエデ、アカメガシワ、動物ではワタナベサイ、ユウバリリクガメなどが並び、その世界に踏み込んだ感じになる。その

1) 地質調査所 北海道支所
2) 地質調査所 鉱物資源部



写真2 ライマンとその弟子たち。

隣には、ライマンやその弟子坂市太郎（明治15年、地質調査所入所）が、この地域の地質調査に果たした功績を、夕張の自然とともに、図、写真、パネルを使って解説する（写真2）。

2階へ上がると、先程の大ジオラマが眼下に眺められ、下で見たのとは違った感動を受ける。

「これが炭鉱だ」では、文字通り炭鉱の全てが展示されているが、中でも目を惹かれるのが「友子取立式」の様子である。友子制度は、古くから日本の鉱山労働者の間にできていた制度で、炭鉱ばかりではなく金属鉱山にもあった。親分子分の関係とも言えるが、一人前の鉱山労働者になったという、資格取得の御披露目制度でもあり、連帯保障（現代の共済制度に似る）のメンバーとしての登録制度でもあったようである。

盛り沢山の展示物を見た後、3面マルチスライドで、夕張の100年の歴史が学べる。丁度、疲れた頃でもあり、すぐ目の先に売店があって飲み物も買える。トイレも近くにある。ゆっくり座って鑑賞するタイミングとしても適当であろう。

さて、一休みが済んだら、いよいよ入坑。堅坑のケージ前の窓から見える景色は美しいが、乗り込んでしまえば、暫くは、地表の明るい景色ともお別れである。それにしても、速い！あっ！と言う間に地下1000mである。

降りた所は明治・大正から昭和までの採炭現場を再現した「炭鉱風俗館」。手掘採炭の「先山」が夫で「後山」がその妻。盤箱を背負って石炭を運ぶのも女坑夫。安全燈の整備点検も婦人の仕事。他の国内や外国の炭鉱でも金属鉱山でも、昔は苛酷な条件下で婦人が坑内労働に従事していた。実際の坑内は、もっと暗く、通気が悪く、湿度・温度が高く、炭塵や岩粉が舞い、独特な匂い・騒音も凄かったであろうと、思いを馳せる。

大正末期から昭和初期になると、コンプレッサーの導入など採炭方法に進展が見られ、女坑夫の姿は見られな

くなっていく。

昭和中期以降、採炭方法にも近代化の波が押し寄せ、施設・機材・用具の著しい進歩とともに、坑内労働の姿も変わる。ここではそれらの変遷が順序よく展示されている。最後は、宇宙服のような装備に身を固めた救護隊の一隊の姿に別れを告げ「炭鉱機械館」に移る。

ここでは、各種の機具・機械が展示されるが、目玉は大掛かりな機械による近代的採炭現場の復元展示で、見学者がくると自動的に作動する（写真3）。あたかも大機械工場を見ているかの様である。

坑内の最後が、かつて訓練用に用いられていた現場をそのまま保存した「史蹟夕張礦」である。大正時代のレンガ巻きの坑道を下がると水平な上添坑道に達する。エキスカレーターの先には本物の炭層が残されており、直に手で触れてみられるのが嬉しい。

上添坑道から下添坑道に至る斜坑は採炭切羽で「ロング」と言われる。自走枠、ドラムカッター、鉄柱などを上から、横から、下からと見ることができる。

下添坑道を抜けると斜坑を上へ向かう。鉄柱、カップ採炭、ベルトコンベアーなどが展示されているが、登るのに夢中になって、その途中に展示されている「タヌキ掘り」の現場と「天竜坑密閉跡」を見落とさないよう。

坑道から外へ出た所が北海道指定天然記念物「夕張石炭の大露頭」の真ん中である。大露頭は「二十四尺層」と言われ、上から六尺（1.8m）、八尺（2.4m）、十尺（3.0m）の3層の石炭層からなる（写真4）。見事な露頭であるが、今日に至るも事故のため坑内に眠る炭鉱マンの霊を思い、掘らずに残した記念碑でもあるとのことである。

大露頭の前に立って見回せば、周囲の山々は何事も無かったかの様に静まりかえっているが、その山肌に見られる段々は、かつて炭住が並び、多くの人々が汗と涙、

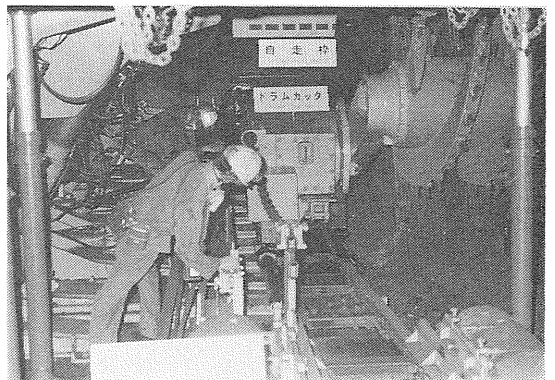


写真3 大型機械がうなる採炭現場。

血と命をかけて働き、生活した舞台であった。静かに耳を澄ませば、当時のさざめきが聞こえて来る様だ。

* 石炭博物館のこと：

所在地：〒068-04 夕張市高松7番地

電話：(01235)2-3417

館長：青木隆夫（以下館員10名）

開館時間：9：30～17：00

休館日：年末年始休館日以外通年開館

入館料：（一般）大人 800円，小人 400円

高齢者・障害者は半額。

（団体：20名以上）

大人 650円，中・高生 500円

小学生 350円。

* 料金は少々高いが、充実した内容で損はさせない。

交通：JR：石勝線「新夕張」駅から夕張線「ゆばり」駅まで30分。

バス：札幌から夕鉄バス，中央バス，美鉄バスで約1時間40分。



写真4 明治21年発見以来そのまま保存されている石炭大露頭。

マイカー：札幌・苫小牧・滝川から約2時間。
千歳から約1時間30分。

OKABE Kenji, YAJIMA Junkichi (1991):
Yubari Coal Mining Museum

<受付1991年5月13日>

中国の資源情報

大同炭田の産炭量など中国一

<中国地質鉱産報> 1991. 3. 11から

山西省の重要なエネルギー資源基地の一つ—大同炭田は、“第七次5カ年計画”の期間における産炭量，外部送炭量，輸出量がそれぞれ歴史上最高の水準に達し，中

国の全炭田のトップに立った。大同炭田がこの5年間に産出した石炭は2.78億t，外部送炭量は出炭量の98.9%に達した。輸出した石炭は2,143万tで，同じ期間の山西省の石炭輸出量の70%を占め，また同じ期間における中国全体の石炭輸出量の25%に近く，外部送炭量・輸出货量とも中国一となった。（岸本文男訳）